中国派遣留学　体験談

国際学部国際文化学科
21017116　丸山　紗弥

一番嫌いな国は中国。物心ついたころから私は中国が嫌いだった。直接何かされたわけではないが、メディアから流れてくる中国のニュースは悪いことしかなかった。日本人が中国を嫌いなように中国人も日本のことが嫌いなのだろう。そういった固定概念があった私は、大学入学当初、自分が中国留学に行くことになるとは一ミリも思っていなかっただろう。しかし、就職のことも考え中国語を選択し、中国に関連した講義を受講していくうちに、メディアからの情報だけで嫌いと断言していたが、実際に自分で留学して本当の中国の姿を見てみたい。そう思うようになった私は、今回の派遣留学への参加を決めた。

留学当初は、慣れない環境での不自由な生活、伝わらない言語に悪戦苦闘した。また、中国に苦手意識があった私は、どうしても日本と中国を比べてしまい虚しさを感じてしまった。しかし、いつまでもそう思っていては良い留学にはならないと思い何事にもプラス思考で中国の生活に溶け込めるように心がけた。そうすると、いつの間にか中国の生活にも慣れ、言葉の壁に恐れることなく積極的に様々なことに挑戦することができた。そうなると、日々の生活がとても刺激的で毎日の生活がとても楽しくなった。こんなにも充実していた四か月間は後にも先にもないと思っている。

留学期間中には、北京以外にも江西や内モンゴルにも行くことができた。中国の国土は広く、歴史も人も日本とは比べものにならないくらいの規模があることは知っていたが、やはり実際に行ってみるとその素晴らしさに圧倒された。特に内モンゴルのツアーは私にとってとても良い思い出となった。長時間のバス移動は非常に疲れたが、乗馬体験・ゲルでの宿泊など留学をしなければ絶対に経験できなかったと思っている。北京とはまた違った雰囲気で、まるで異国にきたような感覚だった。

日々の生活においても、やはり初めはほとんど何も聞き取ることができず自分の中国語力に失望した。授業についても、初めはついていくのに一苦労で焦りを感じていた。しかし、毎日の予習復習を怠ることをせず、電子辞書や携帯に翻訳アプリをいれて日常会話で分からなかった中国語をすぐ調べる習慣をつけた。必死に中国語に食らいついていくことで徐々に中国語が聞き取れるようになっていることを実感した。日本での座学が無意味であったわけではないが実際に生きた中国語が飛び交う生活は私の中国語力を向上させた。また、中国人学生は非常に勉強熱心で、自室から見える教室は毎日夜の１１時まで明かりがついて勉強している人がいることは当たり前の光景であった。そういった姿に私は感化され勉強にさらに熱が入った。

留学当初、中国に対してマイナスなイメージがあった私だが、留学が終わりに近づくにつれて日本に帰りたくないと思うようになった。私がみた本当の中国の姿は、日本のメディア

から流れてくる情報とは全く違っていた。現地で知り合った中国人の友人は皆とても優しくしてくれた。日本人と聞くと、こんにちは！と日本語で話しかけてくれるフレンドリーな人もいた。衣食住に関しても不自由な生活をすることはなかった。大気汚染も常にあるわけではなかった。気候に関しては、新潟よりも過ごしやすいのではないかと感じた。中国人の適当さ加減も、中国人の良さの一つと思えるようになった。

今回の留学で、中国語のスキルアップはもちろんのこと広い視野を持ち何事にも恐れずに挑戦したいと思えるようになった。周りの友人や親戚は依然として中国に対してマイナスなイメージを持っている人が少なくない。しかし私が、実際に見て触れて感じた中国をそういった人たちに伝えていきたいと思う。学力面のみならず、精神面でも成長させてくれた中国にもう一度足を運びたい。そう思えるほど中国の虜になることができた留学であった。